特別寄稿

四大心情圏と三大王権の意義

この原稿は、一九九三年一月十七日、ソウル本部教会の早朝礼拝において李相軒先生が語られた説教の内容に、さらに補充してまとめられたものです。氏族的メシヤ摂理における活動の一助となれば幸いです。

（文責・編集部）

韓国統一思想研究院院長
이 상 헌
李相軒(憲)

序

四大心情圏と三大王権に対してお話しします。周知のように、昨年八月二十五日に行われた三万双の国際合同結婚式典において、成婚問答がありました。四つの成婚問答の最後の問答に、「四大心情圏と三大王権を確立して、理想家庭を実現することを約束しますか」という問いがあり、それに対して三万双が全員「はい」と答えました。これは、理想家庭を実現するための最も重要な条件は、四大心情圏と三大王権の確立であることを意味します。

理想家庭は理想社会実現において最も基本となる単位です。したがって、理想家庭を実現するためには、四大心情圏と三大王権に対する正確な理解が必要となってきます。これは三万双のみならず、その他の祝福家庭全体にも該当します。そこで、四大心情圏と三大王権に対して、このたび文先生が何度も話された内容を根拠にして、私の理解するところを説明したいと思います。まず、四大心情圏について説明します。

本論

一　四大心情圏

（一）心情の概念

「四大心情圏」の意義を知るためには、まず心情の意味を知る必要があります。心情とは、愛を通じて喜びを得ようとする情的な衝動のことです。言い換えれば、愛したくてたまらない情的な欲望をいいます。神はこのような情的な衝動のために、すなわち対象を愛したくてたまらない欲望のために、その対象として人間を創造され、さらに人間の喜びの対象として万物を創造されたのです。

（二）心情圏

ここで、心情圏とは心情の対象の範囲のことです。圏とは範囲を意味します。例えば、文化圏といえば一つの文化の範囲のことです。勢力圏といえば勢力が及ぶ範囲のことです。したがって、心情圏とは心情の対象の範囲、すなわち愛の対象の範囲のことです。心情は愛したい情的な衝動であるために、その衝動は必ず行動となって現れます。この行動がすなわち愛です。ゆえに、心情と愛は表裏一体の関係にあります。したがって、心情の対象の範囲とは、愛の対象の範囲のことです。

ここで、四大心情とは、父母の心情、夫婦の心情、兄弟姉妹の心情、子女の心情という、四つの心情をいいます。心情は愛と表裏一体であるために、四大心情は正に四大愛のことです。すなわち、父母の愛、夫婦の愛、兄弟姉妹の愛、子女の愛の、四つの愛のことです。

（三）縦的愛と横的愛、および家庭的愛

四大心情または四大愛を正確に理解するためには、愛の方向性すなわち縦的愛と横的愛に対する理解が必要です。縦的愛とは下向性の愛（および上向性の愛）をいいます。下向性の愛は、上から下に向かう愛のことで、神の人間に対する愛、父母の子女に対する愛がそうです。（上向性の愛は下から上に向かう愛のことで、人間の神に対する愛、子女の父母に対する愛がそうです）。横的愛は横の愛のことで、兄弟姉妹の愛や夫婦の愛がそうです。ここで兄弟姉妹の愛とは、兄弟同士の愛と姉妹同士の愛、および兄弟と姉妹の間の愛のことです。この父母の愛、夫婦の愛、兄弟姉妹の愛、そして子女の愛は、みな家庭で行われる愛であ

るために、これらはみな家庭的愛です。

ところで、父母の愛、夫婦の愛、子女の愛の三つの愛は、原理では三対象の愛と呼ばれています。神を主体と見た時、父母や夫婦や子女はみな神の対象、すなわち神の三対象であるために、父母の愛、夫婦の愛、子女の愛は、原理では三対象の愛といわれています。したがって、四大心情を基盤とする四大愛は、三対象の愛に兄弟姉妹の愛を追加したものになります。以上、愛の方向および四大愛（四大心情圏）と三対象の愛との関係を説明しました。

（四）四大心情圏と愛の成長

今回、文先生は愛も成長すると言われました。すなわち、人間が子供の時から成長していくにつれて、愛も一緒に成長していくと言われました。子供は生まれた時には愛が何であるか全く分からない状態にありますが、父母の愛のもとで成長しながら、父母に対する愛が少しずつ生じてきます。これが子女の愛です。この時の子女とは、息子と娘のことではありません。双生児（ふたご）のような意味の子供です。息子と娘というような性別の概念をもっていない純粋な幼児、児童のような意味の子女です。つまり、ここでいう子女の概念は、性を超越した中性のような概念です。

次に、兄弟姉妹の間にも愛が芽生えて成長するようになります。やはり父母の愛を基として、兄弟間の愛、姉妹間の愛、または兄弟と姉妹との間に愛が成長してきます。言い換えれば、父母の下向的な愛を受けながら、子女の愛の場合と同様に、兄弟間の愛が芽生え、また姉妹間の愛が生じ、さらに兄弟と姉妹との間の愛が生じて、体の成長と共に愛も成長するようになります。これが愛の誘発効果です。

このようにして兄弟や姉妹が完全に成熟すれば、兄弟は他の家庭の姉妹と、また姉妹は他の家庭の兄弟と婚約し、結婚して、夫婦となります。（近親結婚はしないようになっています）。この時の夫婦間の愛が正に夫婦の愛です。夫婦の愛も各自の父母の愛の中でなされるのはもちろんです。

次に、子女（子供）が成熟すれば、父母（親）となります。この時、父母の概念も性別の概念、すなわち父と母という概念ではなくて、子女に対する親という意味の単純概念です。そして父母（親）は子女に対して父母の愛を実践するようになります。以上、子女の愛、兄弟姉妹の愛の成長と、夫婦の愛および父母（親）の愛について説明しました。

ここで特に指摘したいのは、例えば夫婦の愛の場合、兄

弟姉妹が成熟し、結婚して、それから急に夫婦の愛が生じるのではなくて、成長する中で無意識のうちに、兄弟と姉妹間に夫婦の愛の前段階に該当する異性的愛が少しずつ芽生えてくるということです。その理由は、兄弟と姉妹が成長するということは、夫婦となりうる資格を少しずつ備えていきながら成長していくことを意味するからです。そのために、肉身が成長しながら無意識のうちに、おぼろげながらも異性愛（夫婦愛の前段階の愛）が芽生えて成長するのです。

父母の愛（親の愛）も同じです。子供が成長して親となってから急に父母の愛（親の愛）が生じるのではなくて、子供が成長しながら無意識のうちに親の愛を心の中に感じながら成長するのです。父母の愛の中で成長するために、自分を育ててくれる父母の愛がどんなものであるかを感じ学びながら成長するのです。このような理由のために、子女の愛と兄弟姉妹の愛のみならず、夫婦の愛、父母の愛においても愛の成長がなされてきたことが分かるのです。

（五）愛の内包性

内包とは中に含んで持っていることを意味します。したがって、愛の内包とは一つの愛が他の愛をその中に含んでいることを意味します。このように他の愛をその中に包含する愛とは、主として兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛をいいます。

すなわち、兄弟姉妹の愛は子女の愛を内に含みます。なぜならば、兄弟姉妹は子供として成長する中で、兄弟姉妹の関係を結ぶからです。次に、夫婦の愛は子女の愛のほかに兄弟姉妹の愛までも内に含んでいます。なぜならば、夫婦は兄弟や姉妹が成長して夫婦となるからです。もちろん、一つの家庭内の兄弟と姉妹が夫婦となるのではありません。一つの家庭の兄弟は他の家庭の姉妹と夫婦となり、一つの家庭の姉妹は他の家庭の兄弟と夫婦となるのです。とにかく兄弟と姉妹は成長を完了すれば夫婦となるために、夫婦の愛の中には子女の愛のほかに兄弟姉妹の愛までも内に含むようになるのです。次は父母の愛ですが、父母の愛は以上の愛をすべて内に含みます。すなわち、子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛までも内に含みます。

以上を心情という観点から見た時、兄弟姉妹の心情は子女の心情を内包しており、夫婦の心情は子女の心情と兄弟姉妹の心情を内包しており、父母の心情は以上の心情をす

べて内包しているということが分かります。したがって、心情圏すなわち心情の対象の範囲という観点から見た時、子女の心情圏が最も狭く、兄弟姉妹の心情圏はそれよりも広く、夫婦の心情圏はさらに広く、父母の心情圏は最も広いということが分かります。

これを具体的にいえば、子女の愛の対象は親だけです。つまり対象は一つだけです。兄弟姉妹の愛の対象は少なくとも二つ以上です。それでは夫婦の愛の対象はどれくらいでしょうか。夫婦の心情の対象は一つだけのように感じられやすいのですが、そうではありません。統一原理の夫婦観によれば、夫は一家庭において男性全体を代表し、妻は一家庭において女性全体を代表しているのです。すなわち夫は祖父、父、兄、弟までも代表します。また妻は祖母、母、姉、妹までも代表する立場です。したがって、夫婦各々の愛の対象（心情の対象）は、四つ以上となります。このように、夫婦の愛の対象は互いに一つのように見えますが、実際は四つ以上なのです。

次に、父母の愛の対象はもっと範囲が広くて、以上の対象をみな含むようになります。すなわち、子女、兄弟姉妹、夫婦などがみな父母の愛の対象となります。ここで一つ付け加えたいことは、これら四つの愛はおのおの神の愛のもとで行われるために、神に対して感謝すると同時に、意識的または無意識的に、神を愛の対象とするという事実です。

愛の対象の範囲の大きさという面から見る時、子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、そして父母の愛は、四つの同心円で表現することができます。すなわち、図1のように表現することができます。

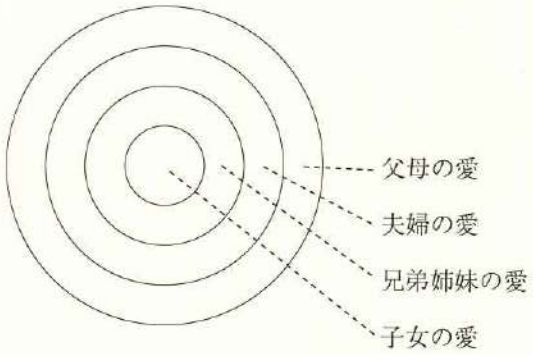

図1　愛の同心円

（六）代表愛としての夫婦愛

以上の四つの種類の愛、すなわち、子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛の四大愛の中で、代表となる愛が夫婦愛であります。なぜならば、夫はすでに話したように、家庭内の全体の男性を代表し、妻は家庭内の全体の女性を代表するのみならず、おのおの神の一性をも代表するからです。そしてさらに進んで、夫は人類の半分である全男性を代表する立場であるし、妻は人類の半分である全女性を代表する立場であり、ひいては夫は全宇宙の個性真理体の陽的な面を代表し、妻は全宇宙の陰的な面を代表する立場であるからです。

夫婦間の愛は家庭におきまして、夫と妻の愛を代表し、神の陽性と陰性の愛を代表し、人類の男性と女性の愛を代表し、全宇宙の半分である陽的側面と陰的側面の愛（結合力）を各々代表するために、夫婦愛の中には神の愛のみならず、人間を含む全被造世界の愛が内包されています。それゆえ、夫婦愛が家庭的愛の代表となるのです。

（七）天宙の中心と愛の結実体

以上の説明によって、夫婦の愛は単に男一人と女一人だけの愛ではなくて、神の愛と家庭的愛と被造世界の愛を総合的に網羅した総合愛であることが明らかになりました。愛が結合すれば相乗作用を起こして、抑制しがたい激発力、発動力となって現れます。このような夫婦の結合の位置は、天宙を代表した位置、すなわち天宙の中心の位置であると同時に、創造理想を完成した位置であり、第二の創造主の位置です。（メシヤすなわち人類の真の父母が、正にこのような第二の創造主の標準型として来られたかたです）。それほどこの位置は最も尊く聖なる位置であり、神に似た位置です。同時に、家庭外のすべての愛（例えば、民族愛、人類愛、万物愛、同胞愛、祖国愛など）も、その根源にはこの夫婦の愛があるのです。

なぜならば、夫婦の愛は単に陽性と陰性の間の愛であるだけでなく、すべての種類の主体と対象の間の愛を代表しているからです。すなわち、性相（心）と形状（体）の愛も、主要素と従要素の愛も代表しているのです。

例えば、夫は天であり、妻は地です。それは神（天）と被造世界（地）との関係です。したがって、夫婦の愛は天と被造物である人間との愛の代表となります。

また男は心でもって女に指示し、女は体でもって行動しますから、夫婦の関係は性相・形状としての主体・対象の関係です。そういう意味において、夫婦の愛は宇宙のすべての無形的存在（心的存在）と有形的存在との間の愛をも代表します。

また、男は主人であり、妻は従う者です。そういう意味で、夫婦の関係は主従関係です。したがって、その点で夫婦の愛はすべての類型の主人と従者との間の愛に対応します。例えば師と弟子、政府と国民、太陽と地球、核と細胞質などがそうです。

さらに、男は人類の半分の男性を代表し、女は人類の半分の女性を代表します。したがって、夫婦の結合は人類の統一を現し、夫婦愛は同時に人類愛となります。そして、男は全宇宙と霊界の陽的な側面を代表し、妻は全宇宙と霊界の陰的な側面を代表しています。したがって夫婦の結合は、全天宙を代表する中心となります。

このように見た時、夫婦の愛は全天宙のすべての類型の愛を代表します。それらの愛はみな神の愛が分化したものです。代表愛、総合愛としての夫婦の愛は正に神の愛そのものです。したがって代表愛を現す夫婦の位置は、天宙の中心の位置であり、第二の創造主の位置であり、創造理想を完成した位置です。

このように本然の夫婦愛は、実に限りなく広く深いのです。夫婦の愛によって生まれる子女はこのような聖なる総合愛の実であり、結実体です。夫婦の愛がこのように神の愛と全宇宙の愛を総合した愛であるために、その愛によって新たに生まれる子女、新生体（新生子女）は、神の子女であると同時に、宇宙を総合した実体相であり、小宇宙の価値を持つようになります。

ここで一つ付け加えたいことは、地上界において展開される現象は二次的な現象であって、一次的には、まず天上（霊界）で行われるという事実です。したがって、地上界に子女が生まれて成長して夫婦となり、父母となるのも、先に同じような現象が、すなわち、アダムとエバが生まれ、子女として、また兄弟姉妹として愛を少しずつ感じながら成長していく現象が、天上で、もっと正確にいえば神の心の中で先に展開されるのです。

子女の成長、兄弟姉妹の成長、夫婦となること、父母となることなどが、地上に現れる前に、天上の神の心の中で理想的な姿として先に現れるのです。神はアダムとエバを

創造する前に、心の中でそのすべての内容を理想的なものとして構想されました。そして後に、その構想どおりに、アダムとエバが子女として創造され、その構想どおりに、兄弟姉妹として成長し、夫婦となり、その構想どおりに、父母になるようになっていたのでした。

ここで、神の構想の中のアダムとエバ、子女、兄弟姉妹、夫婦、父母をそれぞれ霊的アダムとエバ、霊的子女、霊的兄弟姉妹、霊的夫婦、霊的父母と表現します。以上の内容を図で表現すれば、図2のようになります。

（八）四大心情圏の拡大形としての世界的心情圏

①四大心情圏の基本形は家庭的四大心情圏

四大愛は家庭的愛であり、四大心情も家庭的心情です。したがって、子女の心情圏は家庭内での子女の心情圏であり、兄弟姉妹の心情圏も家庭内での兄弟姉妹の心情圏であり、夫婦の心情圏も同じく家庭内での夫婦相互間の心情圏であり、父母の心情圏も家庭内での父母の心情圏です。このように四大心情圏の基本形は家庭的四大心情圏なのです。

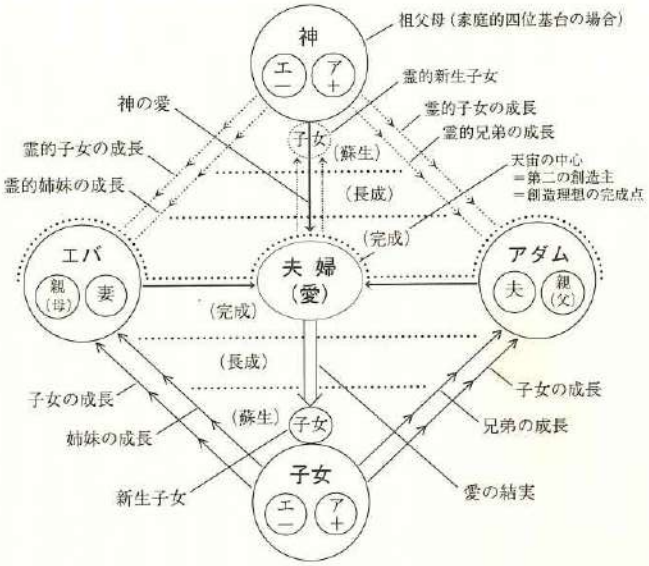

図2　四大心情（四大愛）を基盤とする夫婦愛

②家庭的四大心情圏の拡大形としての世界的四大心情圏

原理によれば、全人類が真の父母を頂点として侍り、大家族を成すのが本然の人類世界の姿です。すなわち、世界人類が真の父母を中心として一大家族を成すのが本然の姿です。言い換えれば、創造理想世界において、人類社会は家庭を拡大した拡大形としての大家族社会となります。したがって、個々の家庭は大家族社会を縮小した小家族社会であるといえるのです。

ゆえに、家庭的子女の心情圏は世界的な子女の心情圏に拡大することができ、兄弟姉妹の心情圏は世界的な兄弟姉妹の心情圏に、夫婦の心情圏は世界的な夫婦の心情圏に、父母の心情圏は世界的な父母の心情圏に拡大することができるのです。したがって、人類大家族社会は世界的な四大心情圏となるのです。

③世界的四大心情圏の説明

すでに述べたように、心情圏とは心情の対象の範囲です。したがって、愛の対象の範囲です。それで、世界的な四大心情圏とは全人類を四大愛の対象とみて、その対象の範囲をいうのです。家庭での子女の心情圏は、子女の愛の圏です。子女が愛をささげる対象は父母です。それで家庭において子女の愛の対象、すなわち心情圏は父母となります。

それでは、世界的な四大心情圏の中での子女の心情圏とは何でしょうか？　それは、父母と同じような年令層の大人たちです。世界的な子女の心情圏における大人たちとは、子女が父母のように尊敬し、侍るべき大人層です。

兄弟姉妹の心情圏も同じです。家庭内での兄弟の心情圏、姉妹の心情圏（心情の対象）はそのまま家庭内の兄弟や姉妹ですが、世界的な兄弟姉妹の心情圏は、自分の兄弟や姉妹のような年令層の男女をすべて含みます。すなわち、これらの年令層がみな兄弟姉妹の心情圏、愛圏に含まれるのです。したがって、世界のどこに行っても、兄弟や姉妹のような年令層の男女に会えば、自分の家庭の兄弟姉妹のような愛を授受するようになります。

次は、夫婦の心情圏です。夫婦の心情圏も同じでしょうか？　いいえ、夫婦の心情圏は少し違います。世界のどこに行っても、自分の夫と年令の似た男性、あるいは自分の妻と年令の似た女性に会った時に、自分の夫や自分の妻に対するのと同じような愛を与えてよいかといえば、そうではありません。なぜならば、夫婦は一夫一婦制の上に成立する異性の関係だからです。すなわち、夫婦の愛は夫婦間以外には決して許されないのです。そのかわり、夫や妻に似た年令層の男女に対しては、自分の兄弟姉妹に対するように愛すればよいのです。これがそのほかの世界的な心情圏と違う点です。

次は、父母の心情圏ですが、子女の心情圏や兄弟姉妹の心情圏の場合と同じです。世界のどこに行っても、自分の息子や娘と同じ年令層の子供たちに対する時、自分の子供に対するように、父母の心情圏、父母の愛をもって対すればよいのです。

以上で、四大心情圏の拡大形としての世界的な四大心情圏に対して説明しました。これで、四大心情圏の説明をすべて終わります。

二　三大王権

次は、三大王権に対して説明します。まず三大王権の意義についてです。

（一）三大王権の意義

三大王権といえば、三大主体とどのような関係にあるかという疑問が生じると思います。三大主体思想において、三大主体とは家庭、学校、職場の中心のことです。王は国の中心であるために主体ですが、三大王権の王は世俗的な王のように一国の王を意味するのではありません。三大王権の王とは、家庭の中心、すなわち家長を意味するのです。家長はとりもなおさず父母のことです。

したがって、三大王権の三大王とは三代にわたる父母を意味します。具体的に言えば、祖父母、父母、子女の三代をいうのです。ここで祖父母、父母、子女の「三だい」の「だい」は、「大」ではなくて世代の「代」です。しかし三大王権という時の「三だい」の「だい」は「大」であって、三つの大きな王権という意味です。このように、「だい」には二つの違った意味があります。

王権は正に王の権限であり、王の主権をいいます。世俗的には、王とはすべての国民を愛でもって治める頂上的な存在、すなわち最高の位置にある存在です。天国においては、すでに述べたように、王は家庭の中心としての長、すなわち父母のことです。家庭においては父母が王です。国においては国王が国の父母です。企業体も拡大された家庭

であるために、企業体の長は企業体の父母の立場であって、やはり王です。

それでは、家庭においてなぜ王が三つあるようになったのでしょうか。家庭の父母は一組であるから王も一組でよいのに、なぜ王が三つあるかというのです。時間的に、過去、現在、未来にわたって王が三つになるのです。すなわち、過去の父母、現在の父母、未来の父母がそうです。それゆえ、三大王とは、祖父母、父母、子女のことです。祖父母は過去の王であり、父母は現在の王であり、子女は未来の王です。

祖父母も、父母も、子女も王であるために、祖父母にも、父母にも、子女にも王の権限が与えられています。したがって、三大王権です。ところが、それらの王権の性格は同じではありません。

(二) 三大王権の性格

祖父母は過去に属する方であり、過去の王です。過去の王とは、過去に地上を代表した王であったということです。それで、今は何でもないかといえば、今も王です。しかし今は地上を代表した王ではなく、霊界を代表した王です。そればかりでなく、神を代表した立場の王でもあります。すなわち、祖父母は家庭において霊界を代表し、神を代表する立場です。

したがって、原理でいう神を中心とした家庭的四位基台は、本然の世界では祖父母を中心とした四位基台となります。本来、家庭的四位基台の中心は神または人類の真の父母ですが、祖父母がそれに代わって四位基台の中心となります。このように、未来においては祖父母の位置が神の位置になります。神の立場は最高です。したがって、子供も父母も、祖父母に侍らなければなりません。

次に、父母は何かといえば、現在の地上を代表する王です。また、家庭を代表するために、父母は家庭における王です。

次に、子女は未来の家長です。現在は王ではなくて、王子、王女のような立場ですが、将来の王であり女王です。子女はまた、すべての後孫を代表する立場でもあります。孫も未来の王であり、その子孫も未来の王です。それゆえ、子女は未来を代表する立場なのです。

(三) 三大王権の表現が必要な理由

それでは、そのまま祖父母、父母、子女と言えばいいのに、なぜ王という言葉が必要なのでしょう。それは王が、最高に尊貴な位置であるからです。

今まで、われわれは祖父母や父母や子女の概念を持っていましたが、それらの概念は創造本然のものと比べれば非常に大きな差があります。われわれは原理を通じて、家庭の貴さや、父母、夫婦、子女の貴さを学んでいます。しかし神から見た父母、夫婦、子女の貴さと、われわれが原理的に知っているものとは、非常に大きな差があるのです。今回、文先生のみ言により、創造本然の祖父母、父母、子女の真面目が初めて分かったのです。王や王子などの用語は、最高の貴さを表しているのです。

われわれは原理を聞いても、人間がどれほど貴いのか、実感することができません。その貴さは、ぼろの着物を着て、みすぼらしい姿をして、賤民の中に隠れている王子に例えることができます。逆臣の謀反によって王位を失った父王のもとを離れて、みすぼらしいぼろの着物を着て、遠く山中に隠れている不運な王子がいるとしましょう。

後に、村の長老たちがこの事実を知って、「万乗の貴き方が、どうしてこのようなお姿になられたのですか。今までわれわれは貴い方であることが分かりませんでした。われわれの大罪をお許しください。不忠をお許しください」と言いながら、その後は、王子に最高の真心を尽くし、最高の位置に立てて、侍ったとしましょう。その時、王子が受ける最高の真心、最高の位置、最高の侍奉は、その王子の尊貴さを表すのです。このように、いやそれ以上に、人間の価値は貴いのです。

父母も祖父母も同じです。今までわれわれが理解していた概念の父母や祖父母ではありません。非常に貴い概念の父母であり祖父母なのです。そのように尊貴なることを表現するためには、王という概念を用いるしかありません。地上において王の地位や身分は最高だからです。理想世界において、人間はそのように貴いのです。それで祖父母と父母と子女の三代を三大王権という概念によって表現するのです。

したがって、いくら自分の子供であっても、父母は彼らを勝手に扱ってはいけません。王が王子に対するように、自分の子供に対さなければなりません。世間の王でさえ、たとえ王子が幼なくても、その言葉をいたずらに無視したりしません。たとえ理屈に合わないようなことを言ったと

しても、王は王子の言葉を傾聴するのです。このように、未来社会では子供を無視してはならないのです。そして子供たちは、父母に対して王や女王として侍り、祖父母に対して大王、大妃として侍るのです。

（四）王権とその概念

ところで、王には王が持つべき権勢、すなわち王権が与えられています。すでに述べたように、祖父母、父母、子女の王権を三大王権といいます。三大王に与えられた王権という意味です。このような観点で、われわれは自分の家族や他人の家族を再認識しなければなりません。家族は王のように貴いのです。

したがって、家庭は正に王宮であり宮殿なのです。王宮、宮殿において、王は地上の王位を子供に譲ってからは、祖父母となり、大王として、霊界と神を代表しながら、家庭の中心の位置にとどまるのです。このように、家庭は宮殿、王宮のように尊貴な場所なのです。したがって、家法は王宮の法、宮殿の法となります。真の父母の家庭がその標本です。そして理想世界になれば、全世界の家庭は真の父母の家庭に似るのです。

最後に、王権における権力の概念について説明します。権力とは、主管の対象に対して一種の恐ろしさを与えるものであり、対象を主体に服従させようとする力のことです。ところで、世俗的な権力（主権）は、物理的な拘束力のことをいいます。すなわち警察力とか軍事力などを用いて国民を強制的に主権に服従させる権威をいいます。しかし、天国の権力は、対象が自ら感謝の心をもって主体に従うようにさせる力のことであって、このような力は正に真の愛の力です。

ところで、天国の権力すなわち真の愛も、対象に恐ろしさを与える権威を含んでいます。それは、神の真の愛に背いたり、逆らう時に、生命の死に対する予感からくる恐ろしさです。愛は生命の源泉です。したがって愛の喪失は生命の喪失（生命の死）とつながるために、主体の愛を無視したり、逆らう場合には、潜在意識がその結果としての生命の死を感知して、恐ろしさを感じるようになるのです。神の愛を限りなく喜びながらも、恐ろしさを感じるのはそのためです。

共産世界における主体（独裁者）に対する人民の服従と、天国における主体に対する人民の服従との差異がここにあ

ります。共産世界では、独裁者は狂暴な手段でもって国民の生命を脅かしながら人民を強制的に服従させてきました。しかし神の国においては、真の愛によって、国民が喜んで自ら感謝の心でもって主体に服従するようにさせるのです。ここに根本的な差異があります。

しかし、服従しなかった時、生命に不利益を受けるという点においては同じです。共産世界では、独裁者に服従しなければ、すぐさま地上で生命が危険にさらされたり、抹殺されたりしますが、天国では主体の愛の命令に従わなければ、その程度によって、死後までつながる永遠の生命に支障をきたすようになるのです。

このように愛には権威が伴うのです。ここに、神の権威を表す聖書の一節をあげておきます。アブラハムが献祭の失敗を蕩減するために、ひとり子のイサクを供え物としてささげる時、神が「あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」（創世記二二章一二節）と言われた聖句があります。これは、神の愛に恐ろしさ、権威が含まれていることを表す聖句です。このように、世俗的な権力は強制的な拘束力ですが、神の国の権力は自発的で従順な服従を誘発する真の愛の力です。

王権は行使されるものです。三大王権の行使とは、祖父母と父母と子女が、それぞれ真の愛の力を対象に施すことを意味します。以上で四大心情圏と三大王権に対する説明をすべて終わります。

統一思想研究院よりお知らせ

成約時代の出発に際し、1993年5月25日～27日まで千葉中央修練所において、李相軒先生による統一思想特別セミナーが開催されました。その時の講義内容を収録したビデオ、カセットテープをご希望の方は下記までご連絡ください。

〒150 東京都渋谷区宇田川町37-17 宮坂ビル4F
統一思想研究院　担当・大和田
TEL 03-3466-5641 FAX 03-3467-6831

講義内容

1.現実問題と平和、2.メシヤと聖賢の差異、3.三大主体思想、4.共生・共栄・共義主義、5.四大心情圏と三大王権、6.未来の理想社会の実相、7.「真の父母」宣布の摂理史的意義、8.成約時代と母子協助、9.摂理から見た韓国民族史、10.世界平和統一堂設立の摂理的意義、11.新南北統一方案、特別講義、披覆の原理